□ ピアノ

真　嶋　雄　大

音楽業界にも甚大な被害をもたらした新型コロナウィルスによる感染症（COVID-19）は徐々に沈静化し，それに伴ってコンサート数の復活増加，ブラボーの掛け声の解禁，オフラインでの対面レッスン，「ラ・フォル・ジュルネTOKYO」の４年ぶりの開催など以前の日常に戻りつつある。それでも完全に終息したわけではなく，少数ながらいまだ感染は続いている。政府は改めて根絶に向けた政策と総括をするべきであろう。

またロシアによるウクライナへの軍事侵攻も先行き不明の上，イスラエルとパレスチナの軍事衝突も激化の一途を辿っている。それに関連して，アレクセイ・リュビモフは来日リサイタルで，ウクライナの作曲家シルヴェストロフの作品を，ウクライナ出身でルービンシュタイン国際コンクール覇者アンナ・フェドロヴァはリサイタルと協奏曲を演奏，一方でイスラエル・フィルの来日が中止になるなど音楽界への影響も垣間見えた。

2023年はラフマニノフの生誕150年，リゲティの生誕100年のメモリアル・イヤー。ゆえに前者では，ミハイル・プレトニョフによるピアノ協奏曲全曲演奏会，掛谷勇三によるピアノ独奏曲全曲演奏会シリーズ，後者ではトッパンホールでのトーマス・ヘルなどによる「リゲティに感謝を込めて」など，それぞれの作曲家作品を採り上げる演奏会やイベントが相次いだ。

海外からの来日ピアニストも活況を呈した。イーヴォ・ポゴレリチはオール・ショパン，ネルソン・ゲルナーはショパン等，ダニール・トリフォノフはJ.S.バッハ等，ユリアンナ・アヴデーエワは武満等，ラファウ・ブレハッチはショパン等，アレクサンダー・ガヴリリュクはベートーヴェン等，ピョートル・アンデルシェフスキはシマノフスキ等，レイフ・オヴェ・アンスネスはドヴォルザーク等，そしてピエール＝ロラン・エマールは，シューベルトとクルタークを交互に組み合わせた興味深いプログラムで聴衆を圧倒した。

一方で日本人若手ピアニストが話題となり，男性では三浦謙司，山中惇史，實川風，高木竜馬，務川慧悟，阪田知樹，久松航，小井土文哉，黒岩航紀，亀井聖矢，谷昂登，田所光之マルセルらが旺盛な演奏活動を展開，女性陣も，昨年のルービンシュタイン国際コンクールで第３位に入賞した黒木雪音や山縣美季，古海行子，奥井紫麻，尾城杏奈，進藤実優，東島由衣，西尾真実，桑原志織，岡田奏など将来を嘱望するピアニストが活躍している。

興味深いプロジェクトも多数。小菅優はベートーヴェン，ブラームスなど５回でのソナタ・シリーズをスタートさせ，高橋望はデビュー20周年及び第10回となるJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」でのリサイタル。また若手が出演する「ヤマハ・ライジング・ピアニスト・コンサート」の第７回には有望な気鋭たちがステージに立ち，北村朋幹は武満徹のピアノ独奏曲演奏会で絶妙なニュアンスを響かせた。

「東京・春・祭」には，ヤン・リシエツキ，キット・アームストロング，川口成彦らが出演して気を吐き，2019年度サントリー音楽賞の河村尚子は３月，受賞記念コンサートで矢代秋雄，エイミー・ビーチのピアノ協奏曲等を演奏，一昨年ロン＝ティボー国際コンクール優勝者亀井聖矢はオール・ショパンでのソロ，室内楽，協奏曲による「Piano's Monologue」をスタートさせ，田中あかねら18人が１曲ずつ演奏するモーツァルト「ピアノソナタ」全曲演奏会が執り行われたのも特筆すべきこと。

さらに1823年，日本に初めてピアノを持ち込んだのはかのシーボルト。それを踏まえて開催されたのが，日本演奏連盟主催の「ピアノの日200周年記念コンサート」で，２夜にわたり濃密な演奏が繰り広げられた。

さて日本人ピアニストの海外進出も話題。クララ・ハスキル国際コンクール優勝，チャイコフスキーコンクール第２位の藤田真央はカーネギーホールでリサイタル・デビュー，モーツァルト，リスト，ブラームスなどで喝采を浴び，恩師野島稔の追悼リサイタル（横須賀）にも臨んだ。藤田には第１回野島（稔）賞が授与されている。またショパンコンクール第２位の反田恭平は，ミュンヘン・フィルの定期演奏会に登場，パヤーレ指揮でラフマニノフ「ピアノ協奏曲第２番」を演奏して聴衆を圧倒した。

翻ってベテラン勢も至って元気。デビュー70周年の深沢亮子は，シューベルト「ピアノ五重奏曲《ます》」などの室内楽を，演奏活動60周年の北川暁子はなんとベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》」でリサイタル，若林顕は「魔弾のピアニスト」シリーズをスタート（第１回はラフマニノフ，ストラヴィンスキーなど），鷲見加寿子は「傘寿のコンサート～教え子達と共に～」として小菅優，佐藤彦大，周防亮介，金子鈴太郎らと５時間にも及ぶコンサートを敢行，井上二葉もデビュー70周年独奏会（リサイタルではなく）で，J.S.バッハ，デュティユ，オネゲル，サマズイユという井上を標榜するプログラムを構築，82歳の田崎悦子は，自身が傾倒するショパンのマズルカで独自の世界を織り上げた。また90歳になったチェンバロの小林道夫は，毎年J.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」を演奏しているが，昨年は50回目。米寿コンサートと銘打った舘野泉の「バースデー・コンサート」は，室内楽での平野一郎「鬼の学校」やエスカンデ「奔放なカプリッチョ」で，満員の聴衆を魅了した。

さて近年，デュオ・ピアノ（二台，四手）による演奏会が目覚ましい。寺田悦子＆渡邉規久雄や中井恒仁＆武田美和子，ドゥオール，デュオ・グレイス，近年日本に拠点を置き，リスト「ファウスト交響曲二台ピアノ版」を重厚に演奏したパスカル・ドゥヴァイヨンと村田理夏子などに加え，福間洸太朗＆河村尚子，上原彩子＆松田華音，大嶺未来＆高橋多佳子，河村尚子＆アレクサンドル・メルニコフ，亀井聖矢＆イム・ユンチャン，牛田智大＆松田華音などソリスト同士が組むケースも目立つ。

さてコンクール関係では，第４回Shigeru Kawai国際ピアノコンクールに優勝したのはニコラス・ジャコメリ，第２回ショパン国際ピリオド楽器コンクールを制したのはエリック・グオ。また賞関係では，日本製鉄音楽賞に務川慧悟と高木裕（タカギ・クラヴィーア），文化庁長官表彰に亀井聖矢，出光音楽賞に亀井聖矢と阪田知樹，佐治敬三賞に北村朋幹，そして日本ショパン協会賞に反田恭平。

楽器関係では，2020年からラトビア共和国で生産されているクラビンス・ピアノが昨年記者会見を開催，日本での展開を発表した。鍵盤も少なく，構造も画期的で柔和な独特の音色がするという。

最後に鬼籍に入ったピアニストたち。小森谷泉（１月13日，68歳），ガブリエル・タッキーノ（１月29日，88歳），エフゲニー・モギレフスキー（１月28日，77歳），メヘナム・プレスラー（５月６日，99歳），イングリッド・ヘブラー（５月14日，93歳），寺西昭子（６月20日，96歳），ヤンドー・イェネー（７月４日，71歳），アンドレ・ワッツ（７月12日，77歳），そしてアナトール・ウゴルスキ（９月５日，80歳）らで，心より冥福を祈る。

2024年の鍵盤界がさらに興隆，発展することを切に願う。